

2017年3月19日(日)

説教:「灯心を消すことなく」

聖書:マタイによる福音書25:1~13

「人の子は思いがけない時に来る」(マタイ 24:44)とは、今朝の「十人の乙女」の話では、「花婿」がその「人の子」にあたる。キリストの再臨のことである。この譬えの中で、大事な部分は、花婿が来た時に「ともし火」を消すことなく、そのともし火を輝かせ続けるということであろう。ではこの「ともし火」とは、何のことを言っているのか？キリストを照らす「ともし火」とは何か？

昨夜、山城博治さんが5か月間の拘留からやっと釈放された。昨日の夕方、那覇拘置所に出向いていた方から連絡が入り、「今、山城博治さんが釈放されました！」とのお電話があった。本当に嬉しく、お互いに涙を浮かべながら「良かった、良かった」と話し合った。先週の水曜日に東京から来た宗教者の方々と、沖縄からも数名のキリスト者、仏教者で、県庁記者クラブで記者会見を開き、マスコミ報道を通して「山城博治さんの即時釈放を求める宗教者共同声明」を発信し、全国の宗教者に呼びかけ、また世界の宗教者に呼びかける運動を起こして行くと呼びかけた。その影響が多少あったのか、無かったのかは分からないが、昨夜、釈放された。

これまで何度か那覇拘置所に出向いて、抗議行動をし、ゴスペルソング集を持って、「勝利を望み(We shall overcome)」を数人で歌った。山城さんのお連れ合いも、毎日その拘置所の前で無言の抗議をされていた。この間お会いしてお話を伺った。連日の状況でだいぶやつれた感じがして、本当にお辛いだらうとお察しする。ただ、山城さんは「私の知らない多くの皆さんが応援してくださることが、とても支えになっています」との事であった。

マタイ福音書 25 章を読み進めて行くと 40 節に「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」とある。そのことはまさに「ともし火」を輝かせているということであろう。私たちは知らず知らずのうちに実は「ともし火」を輝かせている者ではないか？ 大胆なことは出来なくても、小さなこと、祈り続けることでも、それは「ともし火」であろうと思う。辺野古の闘いでよく言われることは、この闘いに勝利するためには、「諦めない」と語り合う。それはまさに、ともし火を消すことなく、輝き続けるということだろう。

私たちは、この世において何を灯すのか？ 神の国にふさわしい明りとは何か？ 教会はそのことを模索し、覚えながら、「地の塩、世の光」として、ともし火を輝き続ける教会として在りたい。神の国とはそういう事ではないかと思う。

私たちは、この世のあり方に常に目を注ぎ、社会の中のキリスト者として生きる時にこそ、私たちはキリストの再臨を待ちわびる者にされる。「主よ、来たりませ！」と願う者になる。私たちの「灯心を消すことなく」共に輝かせていこう。(神谷)